

2020年8月16日
聖霊降臨後第11主日
東京聖三一教会

イザヤ 56:1-7
ローマ 11:13-15, 29-32
マタイ 15:21-28

主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください

誰の人生も安定して穏やかであるとは限りません。手に負えないような困難もしばしば起こり、時折人生の根幹をも揺るがされるような困難も起こります。このような困難がなぜ起こるのか理解できる時もありますが、理解しがたいことも多いものです。私たちが経験しているコロナ・パンデミックも、その理解しがたいことの一つであるかもしれません。それでは、信仰者は身に迫った困難をどのように乗り越えていくことができるのでしょうか？

今日ご一緒に読んだ福音書には、困難にあるカナンの女性が出ています。彼女は、自分の娘が悪霊に取りつかれて苦しんでいました。娘以上に彼女自身も苦しんでいたのでしょう。しかし、彼女はイエス様に出会って恵みに預かり、彼女の娘も癒されました。では、私たちは、この福音書のみ言葉を通して、私たちが経験している困難に打ち勝つ道を見いだすことができるのでしょうか？

出来事が起きたのはティルスとシドン地方です。ここは今日、レバノン地域の海辺の都市として、カナン族が住んでいた所です。イエス様の当時はローマの属州として商業と工業が発達し、大きい港があって貿易が活発な所でした。ほとんどの住民は物質的に恵まれた環境で暮らしていました。ところで、この地方の人々は偶像を崇拜しながら暮らしていました。物質的には豊かだったかもしれませんが、霊的には貧しかったのです。それでイスラエルの信仰者たちは、彼らを「異邦人」と呼んで交わりをもとうとはしませんでした。けれども、この地方の人々はたびたびみ言葉を聞こうとイエス様のところを訪れたりもしました。その中には癒しの恵みを受けた人もいました。

ある日、イエス様はこの地方に行かれました。すると、ある女性はイエス様がいらっしゃったという話を聞いて訪ねてきました。そしてイエス様に自分の娘を癒してほしいとこのように訴えました。

「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています。」(マタイ 15:22)

悪霊に苦しめられるということは、精神の病気で苦しんでいる、という意味かもしれません。他の病気も辛いですが、ことに精神の病気は家族皆に大変な苦しみになります。彼女はどれほど切実に自分の娘が癒されることを望んだのか、聖書には彼女が「叫んだ」と記されています。

ところで、イエス様と弟子たちはこの女性の訴え軽んじていました。いや、かえって厄介に思っていたかもしれません。それで弟子たちは、「この女を追い払ってください」とイエス様に頼みました。弟子たちの頼みにイエス様もこのようにおっしゃいました。

「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところには遣わされていない。」(24)

カナンの女性は、イエス様に娘の癒しを期待していただけにその失望が大きなものだったでしょう。けれども、その女性は、一度断られてもあきらめませんでした。彼女はイエス様にまたお願いをしました。聖書には、その姿を「女は来て、イエスの前にひれ伏した」と記されています。「来て」そして「ひれ伏した」という言葉に注目してください。カナンの女性は、このように積極的に、切実な心をもって頼んだのです。しかしイエス様はまたこのようにおっしゃいました。

「子供たちのパンを取って小犬にやっちはいけない。」(26)

この女性をほかならぬ「小犬」に例えておっしゃったのです。皆様はイエス様のこの言葉をどう思いますか。このごろは犬を家族のように思っている人も多いですが、当時のユダヤ人たちは、犬を不潔な動物であると思っていま

した。そのようなことを考えてみると、イエス様はこのカナンの女性に侮辱的なことをおっしゃったに違いありません。私がおもひの女性だったら、怒って帰ってしまったと思います。

けれどもよく考えてみれば、今日のメッセージの核心はまさにここにあるかもしれません。自尊心さえ捨てることのできる信仰、イエス様が望んでおられたことはそのことだったのかもしれないということです。イエス様のそのよなみ旨を知っていたかどうか分かりませんが、カナンの女性はイエス様の侮辱的な言葉にも揺るがず、むしろ機知に富んだ返事をもってこのように答えました。

「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」(27)

言葉を失わせる信仰です。私は、このカナンの女性の答えが「試練と困難を乗り越える信仰的な知恵とは何か」を示し、「救いと恵みはどうやって来るのか」を示すものである、と思います。即ち絶えず祈ることです。そして、それが神様のみ前に立った信仰者の姿です。今日と一緒に読んだイザヤ書にはこのように記されています。

「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。」(イザヤ 56:7c)

このみ言葉は、私たちが祈るところに神様も共におられ、祈りを通して恵みを得ることができる、という意味です。そして祈りを通して癒しと回復の歴史は成し遂げられるという意味でもあります。

私たちの人生は、誰でも、決して順調であるばかりではありません。自分の意志とは関係なしに、試練と苦しみを経験したりもします。その時ごとに私たちはお祈りします。イエス様にお願いをするカナンの女性の様子が、困難に出会ってお祈りをする信仰者の姿です。しかし、私たちの祈りに神様がお応えくださらないと感じることも多いです。その時ごとに、「神様はどうして私の祈りを聞いてくださらないのか」、「果たして神様はいらっしゃるのか」という疑問がわき起こります。祈りに神様の応答がなければ挫折感や無力感を感じることもあります。そして祈りをやめてしまうこととなります。

しかし、この時が重要です。なぜなら、この時が分かれ道に立たされている瞬間であるからです。祈りをあきらめる瞬間は恵みから遠ざかりますが、祈りを続けていくと恵みの道が開かれるからです。諦めずにもう一度お願いをするこのカナン女性の姿がそれを教えてくれます。イエス様も諦めなかったカナン女性の姿に感動しました。神様のみ前で自尊心などは必要ではありません。必要なことは根気よく祈り続けることです。神様は決して私たちの頼みを断る方ではありません。そして私たちの祈りには決して沈黙なさる方でもありません。沈黙なさっておられるように感じられたら、それは神様が私たちに恵みになる時をお待ちになっておられるのです。

イエス様はカナンの女性におっしゃったみ言葉を覚えてください。

「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」(28a)。

聖書には「そのとき、娘の病気はいやされた」(28b)と記されています。ある方は、「どうやってこのような『遠隔治療』が起こせるのか」と疑問を抱くかもしれません。もちろんそのような疑問を感じたりもします。しかし、ここには象徴があります。私はこれを「恵みの通時通空」と申します。神様の恵みは時間と空間を越えるという意味です。信仰者にとって、「過去に起こったこと、そして未来に起こることは、今日も起こります。」

ですから、私たちが経験しているコロナ・パンデミックという困難も、祈りを通して乗り越えられるでしょう。私たちがお祈りを続ければ、神様は私たちの祈りをお聞きになり、カナンの女性に恵みを与えてくださったように、私たちにも恵みを与えてくださるからです。ある方は、「今まで祈りを疎かにしてきたから神様の恵みを受ける資格がない」と思っているかもしれませんが、しかし、ご安心ください。私たちも洗礼を受けて神様の家族になったので、神様の恵みを受ける資格は十分あるのです。

今日と一緒に読んだローマ書にはこのように記されています。

「神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。」(ローマ 11:29)

このみ言葉は私たちが信仰者になった時から保証されている恵みの約束です。そしてこの約束は、今日、私たちにも有効です。ですから信仰を持って、根気よく祈りを続けられればよいのです。神様は私たちの祈りをお聞きになり、必ず今日のこの困難を乗り越えられるように助けてくださるでしょう。

天気がとても暑いですが、くれぐれもお元気に過ごされますように、また、このカナンの女の信仰を模範に神様の豊かなお恵みが受けられますように心よりお祈りいたします。